

キネステティック・モビリゼーション

看護師による回復支援 — ウルム大学病院における調査研究

概要

患者をキネステティック*¹に従って動かすことに、従来のメソッドと比較してどのような利点があるか。

「キネステティック・モビリゼーション*²」に関する調査研究の結果が、初めてこの共著書で明らかにされた。

呼吸器系、循環器系および筋・骨格系にもたらす効果である。

心臓外科の患者を運動感覚を活かして動かしたときの効果について、2000年にドイツ・ウルム大学病院が調査研究を行った結果、補助具の投入が減少し、患者はより早い段階で動けるようになり、集中治療室を出るのも早まることがわかった。

また、介助者の力を従来のようには要さず、腰痛もほとんど発生しなくなった。

ただし本メソッドに従って動かすことが正しく教えられ、正しく実践されることがその前提である。

本著は心臓外科の看護者の行動指針となると同時に、他分野・領域にも応用可能である。

(出版社のホームページより抜粋・和訳)

2003、アンナ・マリア・アイゼンシンク*³、ハイディ・バウダー ミスバッハ、エリザベート・キルヒナー*⁴ 共著 “Kinästhetische Mobilisation” Wie Pflegekräfte die Genesung unterstützen können – eine Studie am Uniklinikum Ulm.共著: Anna Maria Eisenschink, Heidi Bauder Missbach, Elisabeth Kirchner.

出版社: Schlütersche Verlag

訳注:

*¹ 運動感覚

*² VAP(ヴァップ、VIV-ARTE®ケア・コンセプトの略称)開発当時の名称

*³ ウルム大学病院看護部長(当時)

*⁴ ウルム大学病院所属看護師(当時)